

説教 『 言が人となった 』（クリスマス礼拝）

小河信一 牧師

ヨハネによる福音書 1章14節～18節

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

ヨハネ福音書1:1-18は、慰めに満ちたキリスト讃歌です。それは、福音、すなわち、喜びの知らせを告げているという点で、クリスマスの讃美歌としても耳を傾けることができます。実際、「言は肉（人）となった」（1:14）は、キリストが赤子として産まれた出来事を指し示しています。今日のクリスマス礼拝、この「時」にぴったりの聖句です。

その上、「キリストは肉となった」という神による出来事の恩寵は、御子の降誕日のみならず、すべての日に、永遠に及んでいます。御子の誕生を告げる天使の歌声のように、私たちの心にヨハネの御言葉が染み通るようにと願います。

ヨハネ福音書1:1-18の荘厳なキリスト讃歌には、〈最初〉〈中央〉〈最後〉という骨格があります。

〈最初〉 1:1 「言は神であった。」

イエス・キリストは神と等しい方である。

万物のいちばんはじめに土台をお据えになった方である。

〈中央〉 1:14 「言は肉（人）となって」

神が「肉」の中に乗り込んで来られた。

肉体は軽蔑すべきものと考えられていた。

〈最後〉 1:18 「独り子である神」

御子は父なる神の御心に従って、私たちを永遠の命へと導いてくださる。

先に述べたように、〈中央〉の御言葉は、神の子がイエスというひとりの人間になったことを示しています。

ヨハネ福音書1:14——

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

「言は肉となった」という「なった」は、ヨハネ福音書 1:6 「神より遣わされたる人いであり。その名をヨハネといふ」（文語訳）の「いであり」と同じです。また、同書 1:17 「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」の「現れた」と同じです。つまり、「成った / 現れ出た」（同書

1:3,6,10,14,17) は、キリスト讃歌のライトモチーフ（短い主題）であることに気づきます。暗闇に覆われているこの世に、「万物」、「ヨハネ」、イエス・キリストなる「言」、そして「恵みと真理」が「現れ出た」ということが連写されているのです。

その続きの「わたしたちの間に宿られた」という句には、神と私たちの密接な関係、より正確には、神と私たちの交わりの回復が昭示されています。つまり、神が私たちの「ど真ん中」に住まわれるようになった、あるいは、神が私たちの生活の一切において共に苦しみ共に喜ぶものとなった、ということです。

また、「宿られた」の原意は「天幕（テント）を張られた」ということです。モーセに率いられた荒野の旅において、「天幕」が張られ、その中に「幕屋」が築かれました（出エジプト記 25:9、26:7）。何のために「天幕」が張られたかと言えば、一夜を過ごすため、休息するためというよりも、むしろ、「天幕」に護られた「幕屋」の前で祭司及び民が礼拝するためでした。御子イエスが「わたしたちの間に宿られた」という私たちの人生の旅路において、重要なのは、神礼拝です。御子を世に遣わしてまで私たちと共におられようとする神への応答として、実生活の基点として礼拝を置くことです。

旧約の預言から、「言^{ことば}は肉となって、わたしたちの間に宿られた」という章句に光を当てると、この言葉の真意が掘り下げられます。貧しい隣人のために為すべきことの総括として、イザヤ書 58:7の最終行は、次のように記しています。

同胞に助けを惜しまないこと。（新共同訳）

肉に自分自身をさらけ出すこと。（私訳1）

肉親から我が身を隠さないこと。（私訳2）

あなたは、兄弟姉妹を助ける、隣人を愛すると言うが、その根本にあることは何か？ それは、「自分自身をさらけ出すこと」、主に生かされている自分を包み隠さないこと、と喝破^{かっぱ}しています。相手に対し自分の持っている一部あるいは一時しか提供しないような、情けなく、親身でない自分を省みさせられます。

そう考えてみると、「同胞に助けを惜しまないこと」は、十字架の死に至るまで「自分自身をさらけ出された」主イエス・キリストにおいて成し遂げられたと分かります。カルヴァンは、「身をさらけ出す / 知らぬ顔をしなない」という句に呼応するかのよう、「肉となって」を解説しています。

神の言^{ことば}の霊的な栄光と、私たちの「肉」の腐臭に満ちた汚穢^{おわい}（汚れていること）との間に、かくもはなはだしい隔たりがあるのにもかかわらず、神の子はかくも多くの惨めさに浸されているこの肉体をまとうまでに、その身を卑^{いや}しゅうしたのである。

私たちは、神が「見よ、それは極めてよかった」（創世記1:31）と叫ぶほどに、美しく健全な肉と霊を持つもの、人間として造られました。しかしその後、人間は墮落し罪を重ねるものとなりました。私たちが神を「口」で呪い、悪意やねたみを「心」に潜^{ひそ}ませるうちに、不節制や病苦のしわ寄せが「肉」に及ぶようになりました。ところが、そのような「わたしたちの間に」、人間を決して見捨てない、救い出そうという神の側の一方的な憐れみが、「肉となった」救い主の誕生によって現出したのです。

次に、ある意味では、キリスト讃歌の中へ異なる文言が入り込んでいると言われる二つの節を見てみましょう。洗礼者ヨハネとモーセの働きについて言及しています。

ヨハネ福音書1:15——

ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」

ヨハネ福音書1:17——

律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

※「与えられたが、恵みと真理は……」の部分で、

「与えられた。そのような準備の上に、恵みと真理は……」（熊澤義宣）と読めば、ここでも讃歌の調べは滑らかなです。

ここにまさに「肉となった」イエス・キリストの真骨頂があらわれていると言えましょう。すなわち、主イエスがこの世に、神の言葉と業を伝え広めようとするときに、主の「肉」と同類の者、すなわち、「肉親 / 兄弟」を用いられたのです。

その中には、モーセやヨハネのように、キリストの道への先駆けとなった人がいます。また、これから、神より分け与えられた賜物をもって、キリストから派遣される人もいます。「証しをし、声を張り上げ」るために現れ出たヨハネの跡について、私たちもまた御力により、闇の世に「現れ出る」よう召されています。

ヨハネ福音書1:16——

わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」という中心的使信の内容が、美しく多彩な言葉によって展開されています。

この節では、「独り子である神」、イエス・キリストが「わたしたち」とどのように関われるのか、あるいは、「わたしたち」をどのように救われるのか、が説き明かされています。

「恵みの上に、更に恵みを」という私たちに対するキリストの救いを開示する句は、実は、まさにモーセ以来、人々が待望していたものです。

出エジプト記33:19 神の言葉——

「わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」

※「恵む」及び類語「憐れむ」が合計4回含まれる強調表現です。

出エジプト記34:6 神の言葉——

「主、主、憐れみ深く恵みに富む神」

主イエスは私たちに、神の預言にあずかったモーセの出来事を思い起こさせつつ、全く新たな私たちで「恵み」をあらわされました。

カリン アンティ カリトス (ギリシャ語原文)

「恵みの上に、更に恵みを」 (新共同訳)

「恵み 対 恵み」・「恵みに向き合って恵みを」 (直訳)

「恵みを超えて恵みを」 (私訳1)

「恵みに代わって恵みを」 (私訳2)

キリスト讃歌に内在する可憐な詩です。

次から次へと大波小波のように押し寄せてくる「恵み」です。もちろん、「恵み」の安売りでは

ありません。神は忍耐をもって高価な「恵み」を、適切な時に私たちに与えられます。それは、罪人に無償で施される「恵み」です。この世を顧みるならば、言なる神を「理解しなかった」、「認めなかった」、「受け入れなかった」…拒絶の3連発（ヨハネ1:5,10,11）…というのが現実です。この世は、「恵み 対 恵み」ではなく、「恵み 対 損得勘定（うわべの謝礼や忘恩）」という冷酷さをもって、光を退けようとしています。

その抵抗の壁を打ち破るかのように、「更に恵み」が降り注がれます。そのような神ならばこそ、信仰者に「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」（ローマの信徒への手紙12:21 他にペトロの手紙一 3:9）と命じられたのです。

旧約から新約へという神の計画と成就に即して捉えるならば、旧約の時代、モーセはじめ数多の信仰者を通して、さまざまな「恵み」が与えられました（ただし、人間がそれらに気づくことにおいてまことに鈍かったのです）が、今やイエス・キリストを通して唯一・最大の「恵み」が現れ出たのです。「恵みを超えて」いでたるイエス・キリストの「恵み」は、もはや何ものによっても超えられません。

父なる神は、御子、イエス・キリストという代償……罪人たちに対する身代わり……を遣わしてまでも、「恵みの代わりに恵みを」ということを全うされました。神は、私たちの罪や背きのゆえに「恵み」を途中で切ることなく、「代わりに」また、究極の「恵み」が来たという奇跡を成し遂げられたのです。イエス・キリストこそ、主イエスの十字架と復活の御業こそ、尽き果てることのない神の「恵み」です。私たちは、主イエス・キリストの御業によって確証されている「恵みを超えて恵みを」という神の愛の大波によって守られています。

さあ、キリスト讃歌の〈最後〉に耳を傾けましょう。

ヨハネ福音書1:18——

いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

「この方の満ちあふれる豊かさ」（ヨハネ1:16）と証しされている通り、主イエス・キリストは、十字架と復活の御業を成し遂げられ、私たちを永遠の命へと導いてくださいました。

私たちは、その罪性によって、神を知ることも見ることも困難な状態に置かれていました。そのような中で、私たちに、神の御心が「イエス・キリストを通して」示されました。私たちは繰り返し、イエス・キリストが神を示してくださる、その確かさに依り頼むほかありません。

独り子が父の「ふところ」（胸）にいることについて、カルヴァンは次のように註解しています。

これは、人間から採られた比喩である。自分の秘密をすべて打ち明ける相手のひとを、自分の「胸」に入り込ませる、という場合と同じである。

御子イエスが父なる神に抱かれて語り合っていたことは、何でしょうか。それは、どのようにして罪を犯し続けている人間を救い出すか、ということではないでしょうか。密接な父と子の関係の中で、「十字架につけられよ。神の怒りの杯を飲め」という父の命令が下され、子の「御心のままに」（マタイ26:39）という祈りが捧げられたのです。

モーセは心から願い求めた「恵もうとする者を恵む」神と人間との出会いは、「キリストは肉となった」という出来事において実現しました。そして、私たちは聖霊の働きによって天におられる父・御子との交わりにあずからせていただいています。ところで、栄光に輝く神とお会いする、神の顔を見るという望みのほうは、どうでしょうか。実は、このことも、旧約の預言者の待望をはる

かに超えるかたちで、「更に恵み」を超えて約束されています。

すなわち、私たち、**信じる者には**、「あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない」(出エジプト記33:23)という**主の言葉に「代わって」**(アンティ)、「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる」(コリントの信徒への手紙一 13:12)、または、「しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです」(ヨハネの手紙一 3:2)という**終わりの時の約束が与えられています**。

ヨハネ福音書1:1-18のキリスト讃歌は、私たちが天国に凱旋する時まで歌い続けるものです。なぜなら、「わたしたちはその栄光を見た」(1:14)ということが、再臨の主との出会いにおいて成就するからです。

自分の「宝の箱」を全開し(マタイ2:11)、心を開放して、御子、イエス・キリストをお迎えしましょう。